

文化高知 23

観光三部作

岡村 大

いま山梨県内のJR駅のホームには「風林火山」の旗が林立し、甲府市と周辺の武田信玄ゆかりの地にも、いたる所「風林火山」が風にはためいている。NHK大河ドラマの人気を取り込み、お隣りの首都圏はじめ、一人でもたくさんのお客を呼び込みたいという熱い思いが伝わってくる。

山梨県は人口八十二万人、ほぼ高知県人口に近く、貧しい山国であったところも高知に似ている。しかし、周りを囲む山々をぶち抜いて鉄道と自動車道が四方に伸びた現在、明媚な風土にひかれて流入する観光客は年間三千五百万人に達しており、ここが高知とは大いに違うところである。

「首都圏のヤング層に一番人気のある保養地は八ヶ岳山麓の清里高原だが、ここは長野県だと思っている人が多い。家族行楽に一番人気の富士五湖地方を静岡県と思いつける人もたくさんいる。全く残念」と嘆く山梨の人もあるが、流入観光客の少ない高知からみればぜいたくな嘆きである。

おそらく今年は三割増以上にもなるだろうという、その観光の目玉、信玄

ゆかりの地巡り”は、実は寺院巡りが中心となっている。

信玄の菩提寺で国の名勝指定の庭園を持つ恵林寺、信玄が長野から阿弥陀



「青空道場」竹村文男

氏と、それ以前の甲斐源氏の一族の手厚い保護で、狭い山峡の国に二千近い寺院が点在しているという。

最近出版された写真集「甲斐みほとけの国」の写真家矢野建彦氏は、厨子の扉が開かれて薄暗がりの中に尊像を見た時、しばしば「どうしてこんなところに、こんな立派な仏さんがいらっしゃるのか」と思わず声を発したという。

そして、私の友人の放送局幹部は「信玄ブームを機に、山梨の素晴らしい仏教文化を広く日本に知らせたい。中高年層を引きつけられ、清里のヤング、富士五湖の家族連れ、お寺巡りの中高年で、観光三部作は揃う。あとの総仕上げは、これだ」と観光連盟のパンフレットをくれた。

それはお客さんに二度、三度と訪れていただけるよう、ふるさとの自然、地理、歴史、文化に関する知識を深め、県民のすべてがガイド役になろう、と呼びかける「県民総ガイド運動」だった。——以上、高知の観光開発のご参考までに。

(株)テレビ高知代表取締役社長)

三尊像を移して建てた甲州善光寺、日章旗や孫子の旗、馬印旗を寺宝にする武田三代(信虎、信玄、勝頼)の戦勝祈願寺雲峰寺など、武田ゆかりの寺は九つあるが、この信玄はじめ甲斐武田

今年の花は遅かった。四月二日護国神社の春祭りには、社前の桜は二分咲きであった。雨模様で、年老いた遺族の方々の参集は減り気味に思われた。戦後既に四十余年、日露・日清、さらに維新に遡ると、その御遺族の参集は今もあるのだろうか。現神社の前身は大島岬神社で、その設立は明治二年三月十二日と「豊範公紀」に記される。豊範は私の祖父で、前年五月頃設けられた招魂所を名付けたという。

翌三日は快晴となった。恒例により小倉三省先生の墓前祭が県文教協会と地元長江の共催で行われ、参列する。五台山東北側の旧小倉邸跡の井戸を見て、お馬さんの住居跡から百メートルほど登ると、小倉家の墓地がある。小倉三省夫妻、父君少助殿はじめ、歴代の古風で見事なお墓が並ぶ。日和に誘われ桜は三、四分咲きとなり、樹間に天幕が張られ、護国神社の森下神官により祭りが行われる。和歌の朗詠が印象的だ。小倉家の所領地とはいえ、現今に至るまで毎年の祭りを欠かさない地元の人々の心情と、小倉家の遺徳に感嘆する。

『土佐偉人伝』には、三省のみ記されるが、「漢学漢文」の部で学者の扱いであるが、父子共に執政としての功は高く評価されるべきであろう。少助の

仕置役任命は寛永二年（一六二五）で、これに先立ち猶予を乞うて領内各地の山林等の踏査九カ月、更に浦々の舟運巡見二カ月にして成案を得、材木の切り出しと輸送、更には輪伐制に関して報告し、直ちに実行に移った。時に初期藩制の立て直しである元和改革（元和七年）寛永四年の六年間）の仕上げ時にあたり、

墓前祭まで少し時間があつたので、上の段の「純信お馬出合いの岩」に上る。樹間にポッカーリと見晴らしよく、ランデブーの最適地と思われる。作家のT氏は否定されるが、私はこの伝承が育ってほしいと思う。この岩の側に明石掃門全登の墓がある。私は以前にも来たけれど、この度認識を新たに驚いた。墓石は美良

ているが、もっと宣伝されてよいと思う。同じ有名人で回想されるのは、これも五台山に立派な墓のある伊達兵部のことである。「山内家史料第四代豊昌公紀」（未刊行）の寛文十一年（一六七二）五月六日の記事に、江戸から高知に到着したことや、関連事項が載っており、延宝七年（一六七九）十二月五日の記事に、幕府の検使が来高し、十一月四日に死去した兵部の検屍をしたことが記されている。

五台山の辺り

山内 豊秋

土佐藩林政の名を世に轟かせた。やがて寛永八年に執政に就任する野中兼山の開発資金はこれに依ると目され、少助・三省共に、兼山の良き後見補佐役となっている。三省の仕置

役就任は慶安元年（一六四八）である。兼山を囲む儒学の研究は三省の懇渾によるといわれ、谷時中や絶藏主こと山崎闇斎等を交え、南学の濫觴をなすものである。

布に在住される御遺族によって戦後に建てられ、由来が記されている。知る人ぞ知る大坂役では、真田幸村や毛利勝永と比肩する猛将であり、また熱烈なクリスチャンである。落城後の生涯は潜行であり、少助の養父政景が庇護したようで、墓所も小倉家のものより上段の勝地を供している。五台山の史料にも記され、高知県人名辞典にも補遺の冒頭に載っ

た。お馬さんの邸跡にも井戸が残る。若い頃小倉家に女中奉公した由。私はその墓を訪れた。東京滝ノ川に程近い西福寺で、二基ほどの一家の墓に合葬され、過去帳もある。

五台山はほの白いすももの花に覆われていた。これらの史蹟はもっと観光資源として活用されてよいと思ふ。
（山内興業代表取締役社長）

若いお母さんに 「面倒」という壁を乗り越えて



カット・山中みゆき

岩崎 キクエ

結婚以来、三度目の転勤で岡山へきた息子たちを、ある日訪ねました。五才と二才の孫がいる住居は、企業の社宅が多い地域の一面にあり、ここでは十二世帯がフェンスに囲まれてくらししています。

社宅の敷地はごろ土のまま、芝生も植えず、プランコも砂場もありません。フェンスごとに隣接する一面は遊具完備。羨ましそうにみている孫たちは、ついに、フェンスをくぐってプランコを借りに行くようになりました。

「プランコくらい作ってもらったら……」

「だれもいわないんで何年もこんなんですって」

「すぐ転勤になるから面倒なのでしよう」

社宅の奥さんたちとこんな会話をしたあと、何とも割り切れない思いがしました。

「面倒」、この抽象的な言葉の壁が

くせもので、エネルギーも意欲もある若い母親の足をとめさせているのではないのでしょうか。

壁の向こうで、平和をゆるがすようなこと、子供達の未来にかかわる事態が起こっているとしたら大変です。その裏返しのようなこともありました。

昭和四十年のはじめに、私たちは五年ほど徳島で過ごしました。移ってまもなく、若い奥さん数人が訪ねて来られ、「あなたのいらっしやるのを待ってました」とのこと。

「早耳ですね、それで何のおはなし？」

「女性史の勉強会をしたいんです」 さっそく、徳島大学の日本史の先生をチューターに、月二回の集まりが二年以上続きました。世話役は近くの銀行の寮に住む転勤族の奥さんたち。その交わりは今も続いています。

社会教育に、若いお母さんの参加が少ないといわれますが、社会活動、とりわけ学習への意欲が若いお母さんたちの内に燃えていることが分かりました。徳島駅前のバスターミナルに、ベンチを作らせたのも、原動力はこのサークルでした。例会の時の雑談で転勤族の若い奥さんから出たはなしです。

「バスターミナルに椅子一つないなんて、どうしたの。荷物を置けない

し、老人が腰をおろすこともない。徳島の人、よく黙ってるのね」

この率直な指摘に、地元の人はずをつかれた思いで、燃えてきました。県内のバスすべてがここから発着する駅前でした。調べると、二つのバス会社と国鉄が関わり、請願は役所を入れて四カ所になりました。署名を集め、マスコミへ呼びかけ、お母さん達は幼児、ある人は乳児を抱いて何回も何回も足を運びました。三カ月後に、やっとベンチ五台が、駅前のターミナルに置かれました。本当に、このベンチをなでさすりた

い思いでした。かつて味わったこともない、嬉しさです。いま、地域で、カルチャーセンターで、いろんな催しが盛んですが、そこでどんな質の文化が育っていくのでしょうか。社会活動への参加で、本当の仲間と出会えること、これは何よりの財産です。小さくても企画、運動に携わる中で遂げる自己変革、くらしによるこびとろうのおいもてること、そんなことを大切にしたいものです。

若いお母さん方の、新鮮な感覚と行動力が待たれています。「面倒」という壁を乗り越えて、若いお母さんたちが自らの手で自分の未来を、社会への希望を築いていかれることを期待しています。
（主婦）

（子どもは天才である）



窪田 善太郎

日曜話教室のある日、動物の切り絵をいっぱいはって、「今日は、山の動物たちの遠足ですよ。自分の好きな動物たちに、楽しい遠足をさせてあげましょうね」と、導入する。

「動物でなくても、かまんの」「はいはい。消しゴムでも、鉛筆でも自分の好きな物なら、なんでもいいですよ」

「やったあ。ばんざい」

子どもたちは、目を輝かせて、さっそく絵を書きはじめる。そんな子どもたちの中で、とつてもおもしろい絵を発見した。

「まさちゃん、これなんのえ」と、わたしが聞くと、

「これ、はさみのサーちゃん」

「これは」

「はさみのハーくん」

「この四角いのは、なあに」

「画用紙のカーくん」

「これから三人は、どうするの」「えんそく」

まさちゃんが考えたのは、自分が今この絵を書いている画用紙のカーくん、筆ばこの中のはさみのハーくんやサーちゃんが遠足に行く話。やがて、次のような、おもしろい童話が創作された。

はさみのえんそく
さく・え
たけむら まき 4さい

いいんきの日に、はさみのハーくんと、サーちゃんが、かみのカーくんと、いっしょに、えんそくに いきました。

ハーくんは、えんそくに いくことを、よるわすれていて、よいをしていませんでした。

サーちゃんは、ハーくんに、わけて あげました。

ハーくんは、かわりに、おっぱあけて、それから、うみま つれていって、あげました。

——（以下略）

この発想のおもしろさ。自分の身の回り、手近にあるものなんでもが、生き生きとした命ある物となり、夢の世界が展開していく。しかも「ハーくんは、よるわすれていて、よいをしていません」具体的——実生活。「サーちゃんは、ハーくんに、わけてあげました」と、女の子まさちゃん自身のように、やさしい思いやりの心。それに対して、「ハーくんは、かわりに、おっぱあけて、うみま つれていって、あげました」と、ハーくんは男の子として、素朴な感謝の心を、行動で表している。簡単な表現の中に、幼児らしい発

想や話の展開に、これが、わずか四才の子の創作した童話かと、驚いてしまった。話の構成も「いいんきの日に」と、きちんと設定されており（1）いつ（2）どこで（3）だれが（4）どうした——がはっきりしている。そして、語彙が豊富であるのに驚く。

この四才のまさちゃんが、わたしの「童話教室」へ来はじめたのは、その年の四月。一年生の姉のやすちゃんについて来るお母さんと、いっしょに来ていたのである。そのうち、小学生たちが、楽しくおもしろそうに、絵本作りをしているムードにつらされて、まさちゃんも、どんな絵を書き始めた。

母親の話では、毎日絵本の読み聞かせや、昔話を実行しているとのこと。この、毎日の積み重ねが、幼児の成育にはとても大切なことである。子どもは、天才である。

人間の子ども、すべての子どもが、天才に育つ可能性がある。あらゆる可能性の芽をいだいている。その芽を育てることが、もつとも大切な、教育の根本である。

わたしの童話教室は、教えこむのではない。楽しい伸び伸びとしたムードの中で、子どもの可能性の芽を育て、伸ばして行く場である。

（こうち童話主宰）

高知の街に都市美を求めて 第四回高知市都市美デザイン賞講評

伊藤 憲介

最近の都市に対する市民意識は、高知市に限らず全国的にも多様化とともに大きな変化を示している。従前の生産性や利便性といった機能至上主義による物づくりに対する拒否反応があり、その反動としてアメニティ、ぬくもり、落ち着きなどといったソフト面からの価値評価が重視されるようになってきた。そのことは、単に経済的發展を目指すのではなく、定住のための生活環境としての都市に対し、人間の視覚イメージに訴える都市の美しさ、都市景観といった魅力ある都市環境の創出が要請されているといえる。

そういう認識により、県等においても「美しい都市景観の形成」や「個性と魅力ある都市空間の創出」などをテーマとした行政施策を標榜し、また実践する方向にある。だが、こ

の都市美行政やアーバンデザイン（都市設計）行政が街づくりのための施策として推進されていくためにはいくつかなの問題がある。

一つには、地域ごとのケーススタディにおいて、現在ある都市美に貢献するストック（資産）をいかに保全するか、また、その都市美の要素をいかに増進させるか、あるいは原色看板や電柱などの都市美阻害要因



土佐漆喰や水切りを現代的に活用した「青柳生佳日記ビル」



外部空間にうらおいを与えている「広松久穰邸」

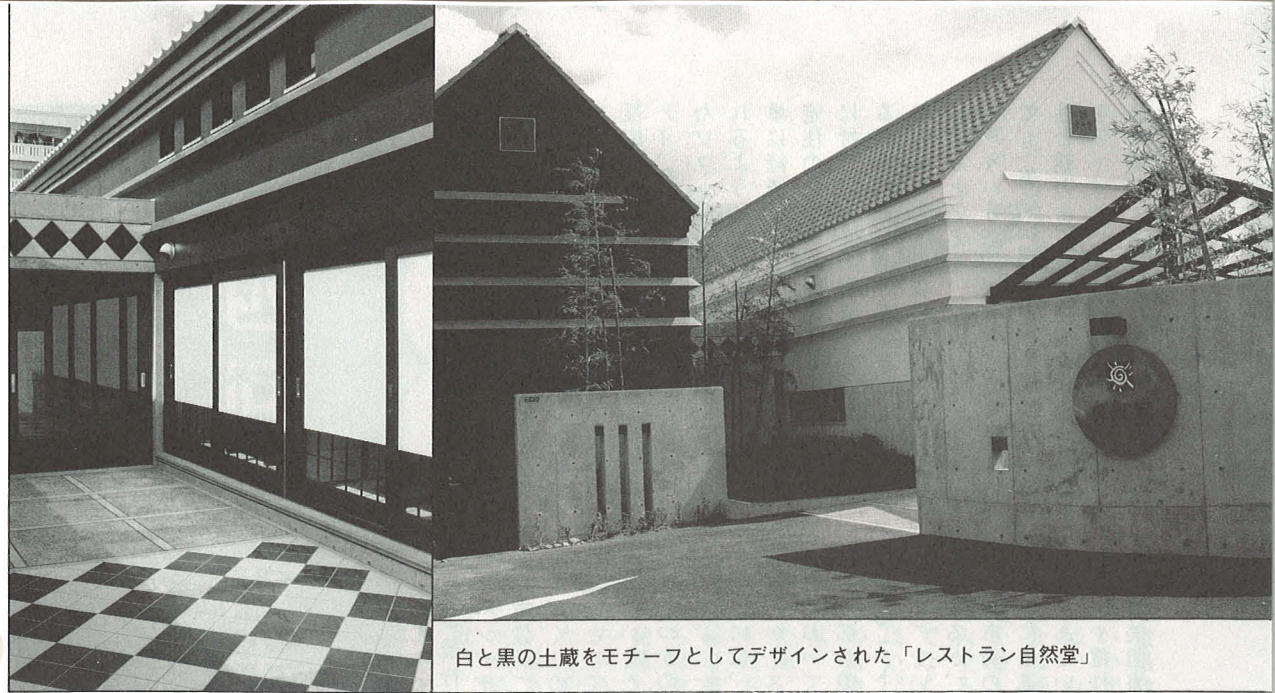
の土蔵（米蔵と道具蔵で、現在は一宮の関川邸が有名）をモチーフとしてデザインされており、外観としては重厚になり過ぎる水切りをステンレスにするなど、シンプルに抽象化して現代性を表現している。また、白と黒という単純な色彩を二棟で対

比することで建築の象徴化を図っており、それが高知という都市個性を美しく表現しているといえる。ただ、外壁の新材材による吹き付けの表情は、テクスチャ（肌ざわり・質感）として考えると、日本建築の風情である雨中の風景としての情緒性がなくなっているような気がする。やはり白と黒の本物の漆喰壁に愛着を感じるの

は私だけであろうか。しかしこの建物は、都市景観として無秩序になりやすい新興住宅地の一角にエポックを造る実験的な試みとして評価したい。

▼広松久穰邸

住宅は本来プライベートな施設であり、そのためかこの賞では対象としていなかったようであるが、現代都市における中心的施設は住宅であり、その環境とし



白と黒の土蔵をモチーフとしてデザインされた「レストラン自然堂」

をいかに除去するか等々の整備手法を確立することで

二つには、地域ごとにその個性、特質を見極めながらそれを育てていくシステムを確立しなければならぬ。まず、都市美を市民共通の財産として認識するために、市民自らが主体となるルールづくり（たとえば「建築協定」など）が必要であり、また、行政はそのルールづくりの支援者としての役割を担う体制が必要となる。

三つには、地域アイデンティティ（独自性）の確立の手法である。最近の都市施設が商業主義的な視点で表現されるため、刺激的な個性建築や広告施設が氾濫

し、伝統性や地域文脈によるアイデンティティが喪失し、総合的な街づくりが不可能となっている。これには道路、公園などといったパブリック空間を含めた総合的な地域計画が必要であり、それを演出し実践するためのコーディネーターの育成が求められている。

都市は、これらの地道な実績の積み重ねによって評価されるようになる。『ローマは一日にして成らず』である。



都市美について市民意識の高揚を目指すこの賞も第四回となった。応募作品にはそれぞれ素晴らしいものがあり、優秀つけ難く、選考は難航した。しかし、全般的には単体として評価できても、都市の景観として考える場合、必ずしも納得できるものとはいえず、その結果、今回も特賞の該当はなかった。なお、この選考は公表された八名の委員中六名の出席によって行われたが、ここでは筆者の私見とその責任において選評を述べてみたい。

▼青柳士佐日記ビル

高知という都市の個性を考えたとき、はりまや橋は単にランドマーク（象徴物）としてでなく、都市の核としての修景計画が必要な場所であ

ての形態が都市住民に与える心理的影響は計り知れないものがある。そういう意味から地域アイデンティティとして、集団的なパブリック空間をも含めた一体的な街づくりが必要である。

今回は、それらについて方向性を示唆したものとしてこの個人住宅が評価された。これは、現在の高地価という都市環境のなかで、プライベートな領域部分を地域の環境に貢献するよう配慮し、それが外部空間にうらおいを与えている。具体的には、建築のデザインやその色彩配慮に加え、塀の外側にも植栽するなどパブリック空間と一体化させている。これは外部空間について徹底的な検証により計画されたと思われる、設計者の高度な技術力、デザイン力がかかわれるものである。

▼その他

入賞作以外にも都市美についていくつかの問題提起があったが、ここでは一つだけ鏡川の改修記念碑「方円の碑」について取り上げたい。これは単体として立派な彫刻作品であり色々と議論されたが、賞としては評価されなかった。この碑は都市シンボルである鏡川でのアイストッとなるものであるが、自然石の碑や鉄板製の環境基準説明板などが併設

る。そういう意味で民間施設も含め、これからどうあるべきかという課題地域である。

この建築は、既存の商業建物をリフォームしただけであるが、現在の恣意的に形成され混乱した街並み景観を考えると、今後の方向を示唆したものといえる。それは、高知独特の土佐漆喰や水切りを現代的に活用し、南国的な明るさと土臭さをもつてオリジナルな表情を醸しだしている。

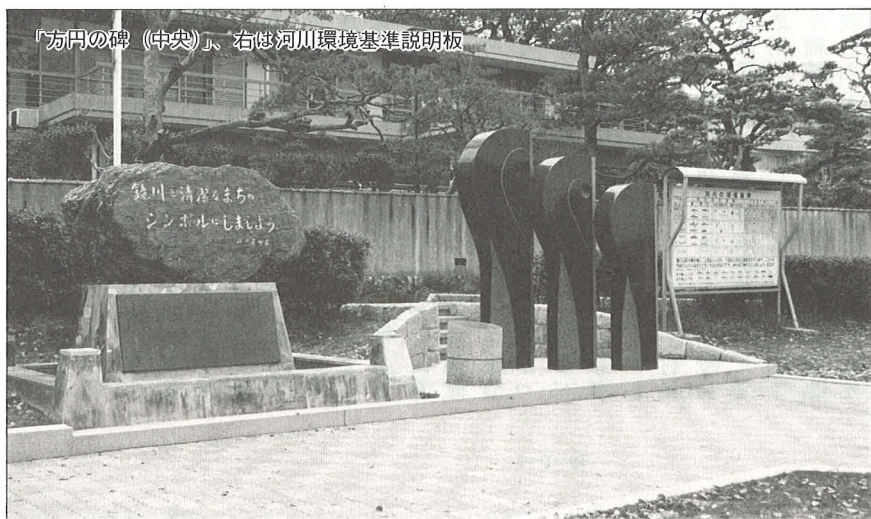
外壁はベンガラ色の漆喰を使っているが、都市の色彩ということから考えると興味ある問題提起となっている。つまり、高知の街は原色の赤色看板が氾濫しているため、日本の伝統的な華やかさを表現するこのベンガラ色が、街の季節的な表情として人々に意識されるほど説得力をもっているかどうかである。逆説的には、これが育っていく都市環境が必要であるが、それには美しいものを奨励するだけでなく、醜いものをいかに排除できるかが重要と思われる。

▼レストラン自然堂

最近の高知の住宅街も中高層マンションが多くなっている。このレストランは無表情なコンクリート造りマンションに囲まれた街なかにあるが、昔土佐の郊外で見かけた白と黒

されており、ランドスケープ（景観）としてのデザインの統一性がない。

同時に、修景計画の手法としてのシークエンス（展開）あるいはヴィスタ（眺望）という考え方も評価し難いものとなっており残念である。（高知県土木部参事）



「方円の碑（中央）」、右は河川環境基準説明板

むらおこし から むらづくり へ

大川村における村勢再興運動の現段階

吉田 文彦

はじめに

さる一月二十九日、来年村制施行百周年を迎える大川村で、その記念事業の一環として、「山の寺小屋」がスタートした。自然教育センター「白滝」で開かれた初会合には、役場農協職員、教員や青年団員など村の若者を中心に約五十人が出席して、これからの村づくりについて夜遅くまで話し合った。

村では、来年（六十四年）の村制百周年を記念して、本年（六十二年）から三年間、全国規模のイベントを含む記念事業を検討しつつある。その準備も含めて、むらづくりに取り組む人たちの外に開かれた相互研修・学習の場として「山の寺小屋」をスタートさせたものである。このなかで、大川村におけるむらづくりのあり方を検討するとともに、これからの山村地域のあり方について広く村内外に論議を起し、山村振興のために全国的な連係を図っていく予定である。

1、概要

大川村は、吉野川の最上流部に近く、四国の中央部・高知県の中央北部に位置する人口七〇〇人の山村で、高知県内で最小の自治体である。同村は周囲を一、〇〇〇メートル

以上の山々に囲まれ、石鎚山麓に源を発する吉野川の本流が村の中央を西から東に流れ、早明浦ダムに注いでいる。吉野川の本支流に沿って点在する海岸段丘や緩傾斜地のほかはほとんど平地はなく、林野が総面積の約九〇％を占めている。村の主たる産業は農林業で、山林では良質の木材が生産されるほか、五葉松、シヤクナゲ等の花木、独特の風味を持つ玉緑茶、黒毛の肉用牛などが産出されている。

ところで、同村は、明治二十二年四月に十五集落が一体となって発足して以来、来年で村制施行百周年を迎える。この間、村民は、産業面では銅や硫化鉄鋼を産出する鉱業、材木や製紙原料等を生産する農林業などを通じてわが国の近代化・資本主義的發展に貢献してきた。

2、試練と沈滞の時期

しかし、近年の大川村は次のようなことから過酷な試練を受け、そのショックで沈滞の時期をたどることになった。

まず、昭和四十六年十二月には、元禄年間に始まり県下随一の古い発掘の歴史を有する日本鉱業株式会社白滝鉱業所の突然の閉山発表があった。続いて四十八年には「四国のいち」の「四国の水瓶」といわれる早

3、村勢再興運動

しかし、過酷な試練と強い危機意識はかえって、ちょっとしたきっかけで村民に勇気と結束力をもたらし、村を挙げての村勢再興運動が始まることになった。

まず、五十八年十二月「謝肉祭」が試行された。これを契機にして、青年団（Ｕターン青年を含む）が活動の最前線に出て、中高年層が彼らを背後から支える形で運動が進められることになった。その後「ふるさと村民制度」「ふるさと村公社」の設立、「ふるさと留学制度」の導入、「白滝開発」の推進などのユニークで先導的なまちづくりの取り組みによって、いまでは大川村は、県下のまちづくりの代名詞に使われるまでになっている。

五十八年に発表された、白滝鉱山跡地を主な対象とする産業開発計画によれば「大川村の主な産業は林業であり、これと農業、畜産、水産、観光等を総合的に関連づけ、相互の機能を保持しつつ産業振興を図り、あわせて村民に活力を与え、若者が夢と希望をもち次の時代を築く基盤をつくることが重要である。

また、ダム建設、閉山等で急激に減少した人口を取り戻すことは至難である。しかし、全国各地で活躍し

ている離村者のふるさと志向の高まりに対して、自然あふれる大川村を「ふるさと」として提供することは大方の賛同を得られるはずである。「ふるさと村民制度」の確立を図り、併せて村の活性化ないしは村勢再興の一助とする』（要約的に引用）として

「小さな村の大きな試み」のスタートであった。そして、この「大きな試み」は着々と実現されていく。村農協、森林組合、木星会などの出資によって、社団法人ふるさと村公社が設立され、旧白滝中学校は自然教育センター「白滝」として生まれ変わった。観光レクリエーション団地、農業団地、畜産団地の整備が次々に手掛けられた。

「観光レクリエーション団地」には二十ポイントのフィールドアスレチック、テニスコート一面と釣堀ができた。謝肉祭会場と兼用の運動広場も最近整備されている。「農業団地」では二haの農園が造成され、水気耕プラント（六十二年三月完成）によるトマト栽培（〇・三ha）も始められた。（これに先だって、大川中学校では、数年前より学校教育の一環として敷地内に実験プラントを設けて、産業化の研究に取り組んでいた）さらに、「畜産団地」には二〇haの肉用牛団地（黒牛牧場）が完成し、

肥育センターとの運営を一本化した。三カ所のバーベキュー広場もつくられた。そのほか、地熱エネルギーの利用についても、通産省の援助を得てその有効利用の可能性について調査を行い、廃坑内の気流熱をハウス園芸に利用することが可能である、という結果を得ている。

「ふるさと村民」はいまや五〇〇人を数える。毎年五月三日の「白滝ふるさとまつり」には鉱山の旧従業員が六〇〇〜七〇〇人も帰ってきて旧交を温める。村最大のイベントとなった大川牛の丸焼きと、バーベキューによる「謝肉祭」には二、〇〇〇人を超える都市住民が参加するようになった。この「謝肉祭」を中心とした「むらおこし」運動は高く評価され、大川村青年団に昭和六十一年、第一回龍馬賞が贈られたのをはじめ、いくつもの賞を得ている。

4、むらおこしからむらづくりへ

このように確かに成果はあがってきたが、これまでのむらおこし事業の中心人物の一人はもともと厳しい見方をしていく。「五十八年を境に以前と以後を比べると、村民の意識も変わり活性化も進んだ。しかし、本当のむらづくりという意味ではまだまだもの足りない。正念場はこれか

明浦ダムが完成したことによって、村の中心部の集落と農地が水没した。これらによって、最盛期四、三〇〇人いた村の人口は大幅に減少して、県下最小の自治体となり、六十年の国勢調査では七五一人となっている。これらの事象は、三十年代後半あたりからその兆候や動きが生じてきていたことではあった。村民は、四十年前後にかけてダム建設に激しく抵抗したものの、結局は押し切られた。しかし、その当時、すでに人員整理が徐々に進みつつあった白滝鉱業所が近い将来閉山にまで至るとは誰も予想していなかった。したがって、現実に閉山と水没が続くことによって、村民が受けたショックは甚だしいものであった。

その後、しばらくは残された村民が村の消滅を現実のものとして受けとめる程の危機的状況が続いた。その期間は、ダムが完成したのち約十年間続いたが、この間（五十年代当初から半ばにかけて）大川村にＵターンしてくる若者たちがいた。しかし、試練に耐えながらも中々展望を見出せない状況にあった村の長老たちは、ますます危機意識をつのらせてはいたが、こうした若者のエネルギーを高く評価するというよりも、かれらの行動を不可解なものとして受けとっていたようである。

「山の寺小屋」は当面、同公社の主催で毎月一回自然教育センターを「道場」に開催され、村外からの参加も自由である。つまり、村人口が短期間に増えることは期待しにくいこともあって、これからのむらづくりに必要な人材を、①村民一人一人とくに青壮年層がさらに成長し、また②都市住民も含む村外の人々との交流・協力関係も促進することで、確保しようというわけである。

上の二つの課題は、並行的に進めることが可能であり、山村問題を解決していくためにも、むしろそうすることが望ましい。「やまの寺小屋」はひとまず、ふるさと村公社のよびかけで発足したが、これから二十一世紀に向けて、若者たちがどのように自主運営し自分たちのむらづくりを進めていくか。また村外の若者たちと係りながら山村・国土の共通する課題に取り組んでいくか、その成果が目される。

（株）くろしお地域研究所所長

今、子どもものの目を

清川 忠彦

先頃、ある会で、山里の学校の教頭さんが、「朝礼で、学校のそばから摘んできたふきのとうを示して、これは何かと問いかけたが、七十名近い児童の中で知っている子は十名ほどしかいなかった。また、藤の花の美しい季節なので、その花の話をしたが、これも名を知っている子は数人であった」ということを話されていた。いずこも同じかとの思いが強かった。

子どもの自然離れについては言われて久しいが、自然ばかりでなく、一つ屋根に住む大事な家族からも、さらに、肝心の自分自身からも目が離れがちなのである。

これらのことは、日記を書かせてみれば手に取るようにわかる。そのままに書かせておくと、自然や家族の話題などはめったに出てこなくなる。マンガ、テレビ、ゲーム類の話題が主となってくる。このような状況について、今やいたずらに嘆いたりしている時じゃあない。子どもの手を取って、こちらにおいてと、好ましい場所に引っぱってきちゃらんといかん時ぞね、と。

こういう話から、鏡小学校では過去五カ年にわたって、日記指導を中心とした生活を見つめさせる教育に力を入

れてきた。教育目標も、郷土の自然や人々のくらしを「見つけ、気づき、考え、行う」ことを大きな柱とした。ところで、生活を見つめさせ、自分のくらしを高めていくために、日記指導は非常に有効な方法であった。「ねうちのある題を見つけよう」という目標が、五カ年の歩みの中で常に大目標として掲げられてきたが、ねうちのある題材は、ねうちのある生活を作り出さないと見出せないのである。その、ねうちのある生活を作り出すために、日記指導は役立つのである。

たとえば自然に目を向けられない子には、「きょうは、家のまわりの自然をしっかりと見つけて、見つけたことをどっさり書いておいで」

手つだいなどできていない子には、「きょうは、必ずおてつだいをしして、したことや思ったことを書いておいで」

「きょうは、お母さんのしていることをよく見て、くわしくくわしく書いておいで」

などと、物・事をしっかりと見つけたり、実際にやらせたりする経験を与えてやらなくてはいけないのである。そうした指導の中から、次のような日記が生まれて来る。

- のうきょうの おかあさん
- 一年 かなおか ゆうこ
- おかあさんは レジがかりです。
おきやくさんが きた とき
いらつしやいませ
- せんえん ちようだいします。
五せんえん おあずかりします。
四せんえん おかえしです。
どうも ありがとうございます。
また どうぞ

といいます。
おかあさんは いつも
にここに しています。
おこつて いたら
おきやくさんが こなく なるので
にここに しちよらんと いきません。

これは日記であるが、また、りっぱな児童詩でもあると思う。母のことはよく聞いている。計算上もちゃんと合っている。最後の一行のしめくり、子どもの正確で厳しい判断力に驚かされる。まったくそのとおりなのである。

同じ一年生の例だが、担任の先生が「みんなに、たくさんあいさつをしましょう。そして、そのことを日記に書きましょう」と、あいさつ運動にかかわる指導をしている時、次のような日記が出された。

あいさつ 一年 ささき ひろみつ
けさ、しらない おにいさんが
はしって ききました。
ぼくが
「おはよう」といったら
「はよう いかんと おくれるで」といって はしって いきました。
がっこうへ つきかけた とき
とかけに あいました。
ぼくは とかけに
「おはよう」といきました。
すると とかけは びっくりして
石の間に かくれました。

高知市近代年表(十一)

昭和三年(一九二八)

1・10 高知商業会議所を商工会議所と改称

1月 20 野村自動車株式会社設立

2・20 第十六回総選挙、最初の普通選挙(政友会二百十七、民政党二百十六、無産諸派八、実業同志会四、革新三、中立その他十八)

3 共産党員全国の大検挙、四百八十八人起訴

3・15 豊栄橋渡橋式

3 帯屋町に公設質屋開設

4 大島破竹郎、知事に就任

5 坂本竜馬銅像除幕式

5 雑味場橋落成渡橋式

8 高知駅・潮江棧橋電車開通

8・7 土電スト実施

8・10 土電スト実施

12 土電スト実施

△この年、帯屋町に市営公設場を設置

昭和四年(一九二九)

1 新月橋落成

3 労働大衆党県連結成

3 日本紙業質上げスト実施

3月 25 浜口雄幸民政党内閣成立

7・2 農民騒動(県の米穀検査に反対する農民を組織した土佐農民総組合と高知県農民組合がその廃止をもちとる)

7 田中無事生、知事に就任

8 片倉製紙・高知巡航スト

8月 19 漁民騒動

11 社会民衆党県連結成

11 九反田橋竣工

12 昭和五年(一九三〇)

1 高知中央卸売市場開業

2 第十七回総選挙

3月 20 高知無尽会社開業

こんどは ひしばつたに あいました。
ぼくは
「おはよう」といきました。
ひしばつたは びくとも しませんでした。
ぼくは はしって がっこうへいきました。

なんとという大らかで、あどけない世界であろう。とかげも、ひしばつたも、このお話の登場人物である。これはそのまま詩であり、童話である。

ところで、この日、この子は学校に遅れたのであるが、担任の先生が、「あの子を今朝おこらなくて、ほんとうによかったです」と、日記を手に話していたのを思い出す。子どもたちが、生活をよく見つけた日記を書き、それが認められると、さらに深くかわった日記を書いてくる。それらを学級で、全校日記集会で読み合う中で、ねうちのある題材(生活)とはどんなものかについて目が開けてくる。これが大切なのである。

鏡小では、校長は月に二回、教頭と養護教諭は一回、全校の子どもの日記に赤ペンを入れてきた。この試みは、鏡小の学校づくりの上で大ホームランであった。一人ひとりの子どもと心が通じたいし、今子どもの目がどちらを向いており、今どのような指導が必要であるかを、子どもたちからつぶさに教えられたのである。

養護教諭などもただ虫歯が何本ある、視力がどうであるといった見方だけでなく、それぞれ異なった生活と心の営みをもって生きる人間としてとらえ、その健康と幸せを願う姿勢へと変容していったのであった。

最も確かな教育は、子どもたちに、その足元をみつめさせることから出発すると、私は日頃考えてきた。日記や作文の指導は、その願ってもないよき方法である。

(元鏡小学校校長)

4 高知、千松、五台山公園を県立公園に指定する

11 浜口首相東京駅で狙撃される

△この年、赤石町に公設市場増設される

昭和六年(一九三一)

5 菜園場橋竣工

5月 1 土佐乗合自動車合資会社を土佐バス株式会社に改組

6 県立中学海南学校、城北中学校が合併、争議化する

6月 1 坪井勸吉、知事に就任

8 浜口雄幸逝去(六二)

8・26 満州事変勃発

10 仙石貢逝去(六六)

12 金輸出再禁止

12 赤松小寅知事に就任

△この年、街路市が市の直営となり、各曜市の場所と長さが定められる

昭和七年(一九三二)

1 近森虎治頌徳碑除幕式

1 上海事変起ころ

1 朝倉連隊、上海に出征

2 満州国、建国宣言

3 坂間棟治知事に就任

3 高知放送局JORK開局

3 朝倉連隊帰県する

5 犬養首相暗殺される

5 排英県民大会開催される

11 県立海南中学校落成式

11 昭和八年(一九三三)

1 村上清、市長に就任

2 土佐国防協会結成

3 国際連盟を脱退

3 窪川に谷干城銅像除幕式

5 高知新聞社、浦戸湾に水上飛行場を設定

5 全日本商榷保護高知県支部結成

11 24

幕が上がるまでが俺たちのステージだった



島村 一夫

「北海道は広い！ 寒い！」。そんな書き出しの葉書が届いた。劇団「ふるさときゃらばん」の制作部の方からの便りである。

同劇団の高知公演からほぼ一カ月が経っている。公演直後に北海道に飛んだ彼女達は彼の地でも「あなたの町で劇団の公演をしませんか」「いい劇ですよ、あなた方で主催しませんか」と、その活動を始めているのだらう。この制作部の取り組みこそが、同劇団の大きな特徴であり、「ホールに来る前からの客の盛り上がり」の訳がここにある。単に公演の準備だけでなく、地域の人々のやる気を起こさせ、遂には町ぐるみの運動にまで広がってゆく原動力となっているのだ。いわば「文化おこし」の取り組みと言えらると思う。

この高知では、越知町をはじめ、

南国、西土佐、吾北、物部、香我美、安芸の各市町村で若者達を中心に実行委員会が組織され、取り組みが始まった。高知市での公演は四月十一日からの三日間であった。演目は「ミュージカル・ザ・結婚」。全国で四百回を超える上演回数を誇る人気の演目だ。しかし、この高知ではほとんど無名だった。この「無名」という哀しさは、おそらく他の土地よりも大きいような気がしてならない。それは私達の売券活動の折に聞かされた声からも分かる。「誰が出るが？」この一言が始まり、「農村問題は関係ないき」で終わってしまうのだ。「いい劇だから……」だけで説得できないもどかしさがあった。中央志向の強い土地柄か、有名でないものは即「マイナー」であり、「ダサイ」ものと受け止められるようだ。それ

だけで高知の人々の文化のレベルを云々する気はないが、何か気になる反応であった。

「高知応縁団」を結成したのは、公演日の二カ月前。しかし、例の制作部のメンバーに一人ずつ声をかけられて集まった、いわばバラバラの集団である。まして、見たこともない劇団を応援し、券を二千枚もさばくという、非常に厳しい取り組みである。仲間になる・仲間を増やすことから始めるしかない。そのためには、共通の目標と、その完遂の感動体験を共有することが必要だった。

そこで、イベント型の取り組みを次々と開いていった。「結成パーティー」をはじめ、「役者と語る会」「ビデオを観る会」などを経て、「みんな成功させる集い」に至るまで、呼び掛けの材料づくりに追われた。仲間の団報「DAN・DAN」の第一号に私達の合言葉を掲げた。「いい劇だ、そのはずだ、きつときつと疑うな」「あわてない、あせらない、でも時間がない」——等々。結局これには後にメロディがつき、みんなを励ます団歌となった。その歌の最後には「幕が上がるまでが、俺たちのステージだ」と、何度も繰り返すフレーズがあり、劇団を信じて自分達の友人を引き合えず私達の実感として愛されたのだった。

遂にその幕が上がった。初日は五五〇の入り、中日が六五〇、千秋楽には定数の七〇〇を超えるお客さんで場内は膨れ上がった。幕が降り、一人ひとりに大人袋を手渡す団員の顔は、何とも言えない本当にいい顔をしていた。きつこの日を一生忘れないと信じられる。

いい舞台とは、見せ物自体のレベルだけで決まるのではなく、見せようとするとする者たちや、見に来る人たちが一緒に作り上げる空間のことだと思ふ。単にいいモノに触れるだけでなく、いいものに育ててゆく、創り上げてゆく文化——いわば大衆参加の文化が私は好きだ。

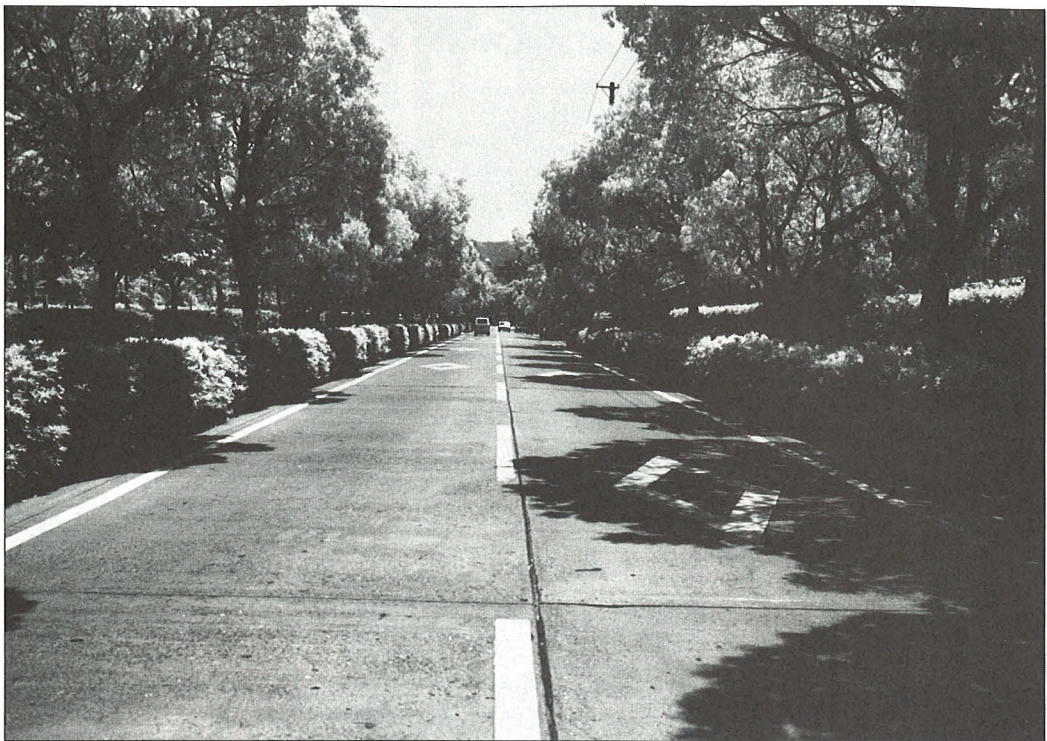
現在計画が進められている「ミュージカル龍馬」は、市民による市民のミュージカルを指すと聞いている。自ら参加し、自らを鍛え、自らを表現する。そして、その集積を自ら呼びかけた人たちに見てもらおう——「呼んでくる文化」よりもなお一層「楽しい文化」となるはずだ。一緒に楽しむことのできる風土であってほしいと思う。

「きゃらばん」は去ったが、「高知応縁団」はこの町に生きている。だから今後は、この町で一生懸命に頑張っている人達の力になれば嬉しいと思う。

(音楽集団ぐうびいば主宰)

私の風景

門田 卓也



五月のとある昼下がり。新緑が南国のきつい日ざしに反射して、一年中で一番気持ちのいい季節です。街路樹の下は歩道、すぐそばには城西公園があり、市民のかつこうの散歩コースになっています。

越前町1丁目～桜馬場

「あんたらア遊びよって仕事になるがやきえいねエ」

別に遊んでいる訳ではないのだが、よく友人からもこう言われるように、私の仕事はレクリエーションやクラブ活動の計画と準備、そしてそれを一緒に楽しむことが大きな部分を占めている。ただ、それが単なる遊びにとどまらないのは、その対象が治療を必要としている人達というところにある。

今、私達が住んでいる社会は、一見豊かで恵まれているように映るが、他方では極度に管理化が進み、熾烈な競争が強いられる社会でもある。その社会の中で、息切れを起こし、自分を取り戻そうと試みれば、たちまち不適応を起こして、周囲(社会)から「落ちこぼれ」のレッテルをはられてしまう。外傷に限らず、心の病や日常的なストレスについても同様に、人には自分で病を治そうとする力がある。が、それすらも一時的に妨げられ、停滞してしまうような状況が多々みられるのである。

私の仕事(臨床心理士)は、そうした

それぞれの仕事

臨床心理士

井上 さわ

力が最大限に生かされるよう、保護された空間と安定した人間関係(患者と私)をつくり出すこと。そして患者自身を客観的にとらえ、治療の目標設定や経過を追ってゆくための心理検査を行うことである。

この春で病院の一年のサイクルを一通り経験した。大きな希望と過大な理想を持って臨んだ私も、社会の厳しさというよりは治療者としての自分自身の器という問題にぶつかっている。今の私にとって、院内で声をかけてくれる人達が少しずつ増えて来ていること、これが何よりの励みであり、私自身の質の向上へと駆り立ててくれるものである。

高知県は地理的な条件から、中央での活発な動きに直接触れる機会も限られてくる。まだまだ数から言えば充分でないこの職種について、やはり大切なのは経験と研鑽だと言われるが、社会人になっても学習できる場がもっとあればと切に思う社会人二年生である。

主演者も女性も同一労働

帆足 寿夫

十五年間、洞ヶ島の薫の神社内にある薫の座を根城に、年二本の新作を発表している。創立は昭和四十七年、帆足寿夫を主宰者にRKC劇場としてスタート。十年間RKCの助成があったため、照明や衣装など基本的な器材は自前で持つ。現在も会費や負担金はなく、入場料収入と文化祭・芸術祭助成金で運営している。綱領や会則、会議など一切なく、主宰者が「これ面白い、今度はこちらの一言ですべて決定。ただし主宰者はそれ以降、美術アイデア、選曲、演技指導、経費削減に呻吟させられることとなる。

上演レパートリーを列記すればその傾向が分かるかもしれない。井上ひさし、藪原検校、雨、日本人のへそ、イーハートポの劇列車、頭痛肩こり樋口一葉、国語元年、他。唐十郎住み込みの女、ふたりの女。清水邦夫夢去りてオルフェ、薔薇十字団渋谷組。その他渡辺えり子、鴻上尚史、松原敏晴、大橋泰彦の若手作家群。ニールサイモン、ジェルジュフエドールも時に



高知エスペラント会

中立の言語で世界に友を

岡田 泰平

母国語を大切にし母国の文化を守り育てることは、貴重なことだと思います。一方、異民族が中立の共通語を持ち、おごることなく、いじけることなく、自由に意志の交流を図ることが出来たら、どんなにか素晴らしいことでしょうか。便利であるばかりでなく、言葉障害とするいろいろな誤解や争いもなくなりはいませんか。今から百年前、ヨーロッパをはじめ世界の各地でこんな思いから何百という試案が考えられました。そしてポーランドの眼科医ザメンホフがエスペラントを発表しました。ここ百年の間に逐次普及し、今では国際語といえ、エスペラントのことになっていきます。高知では昭和初年何百人の人がこれを学び、月刊の機関紙も発行されていました。不幸な大戦のため戦後低迷していましたが、昭和四十七年になって、片岡・徳永両氏など有志の呼びかけで高知エスペラント会が再発足し、以後初級講習会・研修会・親睦会・展示会・国内外の同志を迎えてのいろいろな



行事などを行ってきました。現在高知では会員三十名位ですが、活動的な方は十名位です。会では入門通信講座(無料、但し通信費負担)を開いています。通信講座ですと随時参加出来ます。少しでも興味のある方、いつしよに始めてみませんか。電話あるいはハガキでの御連絡をお待ちしております。(高知エスペラント会会員) 連絡先 〒780高知市一宮1340-119 都築淳一 電話45-84440

くらしをみつめる会

日々のくらしの中から

内田 洋子

私達は、結成して一年の消費者グループで、やっと歩きだした、三十名のヒヨコ団体です。私達は、市役所の消費者講座『くらしの学校』『ワークセミナー』を通じて知り合った仲間達が集まって、食用廃油から石けんを作ったり、牛乳パックから和紙を作ったり、ごみ問題を話し合ったりしている中で、誕生しました。私達の仲間は、高知市の各地から集まっています。また年代層も、広範囲で、もちろん考え方もいろいろです。でも歩いてきた時代、道程は違っていても、違いは違いつつ認め、話し合いを大切にしたいのです。そこで、会のスローガンを御紹介します。

一、仲間のひとりひとりを大切にします。二、みんなが、生き生きと活動できるよう、工夫します。三、自己の値打ちを高め、社会に働きかけます。初年度は仲間づくりを第一に、班に分け、持ち回りで、いろいろな勉強会をしました。今年度は、もっと落ちついて、各班ごとに決



若竹スポーツクラブ

生涯スポーツを目指して

武田 梅子

「最も大きな財産は日々の健康である」アメリカの哲学者エマーソンの言葉です。エマーソンでなくても健康でありたいことは万人共通の願いではないでしょうか。三日坊主にならないために、気の合った仲間と始めた「身体を動かす」ことが十二年間続いています。丈夫で長生きをするために、特定のスポーツに限らず、「いつでも、どこでも、だれでも」をモットーに現在会員数五十一名(男性六名)。会場は潮江中学校体育館(毎週水曜日午後七時三十分～九時三十分)です。



発足当初は市の社会体育課の先生に御指導を受けましたが、クラブの基礎が出来てなかつたこともあり、一度は解散も考えました。しかし、指導の先生のアドバイスにより、身体を動かすことの重要性、今後の社会情勢を再認識、解散会が再出発の会になりました。今では会員の中から指導者を養成し、クラブの運営を会員相互の協力により支えています。毎日の健康を目標に、ストレッチング、エアロビクス、ピンポン、

挟まれる。主宰の帆足は高校演劇から演出研究所を経て三十四年目。帆足由美二十年、川村修十二年、清水ひさ子十三年、前川博志三十年、川島敬三、十年などのキャリアで劇団を支える。三年目の古浦よし子、松田昭彦、小西智子なども貴重な戦力。来年上演の市民ミュージカル・龍馬では、演技指導スタッフとして活躍するだろう。主宰者が健在なら一九九九年まで活動する。(演劇センター'90主宰) 連絡先 22-2111 (高知広告センター・帆足)

行事などを行ってきました。現在高知では会員三十名位ですが、活動的な方は十名位です。会では入門通信講座(無料、但し通信費負担)を開いています。通信講座ですと随時参加出来ます。少しでも興味のある方、いつしよに始めてみませんか。電話あるいはハガキでの御連絡をお待ちしております。(高知エスペラント会会員) 連絡先 〒780高知市一宮1340-119 都築淳一 電話45-84440

めたテーマを勉強してゆく予定です。消費者運動も、やはり原点は個々の家庭にあります。各々の「くらし」に対する考え方は、その人の「どう生きてゆくか」という人生観にまでかかわってくるのではないのでしょうか。仲間を大切に、自己を高め合ってゆきたいものです。ただ今、人生真っ最中(まささいちゅう)、仲間に入って、一緒に、生き生き活動しませんか。(くらしをみつめる会会長) 連絡先 25-1773 (内田)

ミニバレーなど屋内スポーツを中心に汗を流しています。平均年齢四十七歳ですが、このサークルに参加することで若々しい精神と身体を保っています。また、水曜日以外には会員の特技を生かし、料理教室、水泳、着付け、社交ダンス、英会話といった幅広い活動も行い、体操だけでなく地域に根ざした生涯スポーツのクラブを目指しています。(若竹スポーツクラブ会長) 連絡先 33-3001 (武田)



高知市のすべり山の北側、変則五叉路のぼぼ真ん中にある岩と一本の木。交通の妨げになりそうなこの岩、実は高知市保護天然記念物「江北麓の含化石石灰岩塊」と名付けられたもの。二億二千万年前の海底堆積によってできた石灰岩質礫岩で、標準化石のフズリナ(紡錘虫)を含んでいるという。車で走っているとなかなか気のつかない記念物です。

伯風

公文書館時代

昨年の暮れ、一つの法律が公布された。おおかたの注目を集めるような、はなやかなものではなかったかも知れないが、文化を考えていくうえに見落とすことの出来ない重要な法律である。

「公文書館法」というのが、その法律である。日本でも、はやくから公文書館の重要さが強

調されて、関係者間でそうした運動が熱心に続けられていたが、なかなか法制化の段階にまで到らなかった。それがようやく今回法制化されたのである。うれしいことである。だが、手放しでよろこぶべきでもない。実際にこれがどう実行されるかは、すべてこれからの取り組みにかかっているからである。

美術館や博物館など、マスコミがわいわいわぎたてるものについては、行政も目を向けるのだが、このような地味なものは敬遠しがちであるからである。法律ができたからといって、問題がすぐ解決するものではない。文書館の存在は、日本以外の国々ではごく常識になっており、どの国でも重要な公文書がよく整理され保存されているが、日本の現状は発展途上国なみといっている。国家的にも自治体においても、本格的に取り組まれるべき問題である。最近の情報公開も、必ずしも充分とはいえない。

歴史は決して後ろを振り返るためにだけあるのではない。先人の歩んだあとを学ぶことによつて、これからの方向をさぐっていくことにこそ意義がある。そのためにも公文書館が必要である。折角の公文書館法の成立を機に、こうした運動が大きく前進することを願いたい。(垂)

文化セミナー「日本人の『食』の習俗くせ」

日頃私たちは「食べる」といえば、「おいしいものを食べる」ことに意識が向き、「食べる」という行為そのものは日常当たり前のことと考えがちです。ところがこれが、外国の人々から見ると少しも当たり前でないという事実があります。この私たちが当たり前と考えている行為こそが日本の食文化であり、「食」のくせです。

六月の文化セミナーでは、日本観光文化研究所で長く民俗学や民族学を研

- 参加費 無料
- 申し込み 電話か葉書で事業団までお申し込み下さい。定員は申し込み先着80名まで。
- 日時 6月10日(金)午後3時～5時
- 場所 高知県国保連合会2階会議室 高知市丸ノ内2-6-5

市民と留学生の交流会「ハロー・ワールド」

ここ数年、海外からの留学生の数は増え続けており、高知大学への留学生も三十名を超え、国際化は高知でも進行しています。そこで、留学生の生の声で、市民の方々に各国の事情を肌で感じて頂くと同時に、市民との交流を通じて、留学生により広い視野で見聞を広めてもらうことを目的に、市民と留学生の交流会「ハロー・ワールド」を開催します(事業団主催、高知大学留学生を支援する会共催)。

全四回の予定で、第1回は「オーストラリア・デイ」として、オーストラリア・ケアンズ高校の修学旅行生と同

- 申し込み 電話か葉書で事業団までお申し込み下さい。定員は50名です。
- 日時 6月19日(日) 午後1時半
- 場所 高知市中央公民館4F会議室
- 参加費 一回300円
- 申し込み 電話か葉書で事業団までお申し込み下さい。定員は50名です。
- 日時 6月28日(日)「マレーシア・モロッコ」、第3回は10月19日(水)「中国料理講習会」、第4回は11月17日(月)「日本語弁論大会」と不用品即売会、の予定になっています。

第4回高知の映像コンテスト入賞作決定

多くの方から応募頂きました第四回高知の映像コンテスト入選作品が決まりました。今回は写真の部一五九点、ビデオの部一五五点の応募作品があり、次の通り決定しました。

- ◆ 写真の部 特選(順不同)
 1. 「県下初の変電所・発電所」小松将勲
 2. 「須崎小学校と新莊浜の漁具入れ 小屋風景」曾我義雄
 3. 「掘詰」中井秀夫 準特選
- 1. 「手結港点描」川谷康
- 2. 「心の市」谷次郎
- 3. 「上の橋と大川筋の家並み」松本英夫
- 4. 「小さな港伊田漁港」宮地一栄
- 5. 「変身(半平太像)」浜口俊一
- 6. 「湖水に散る桜」国光敬一
- 7. 「甕れ!ドロマ漁」大津修
- 8. 「64高校総体を待つ春野総合運動公園陸上競技場」原康晴
- 9. 「紅葉橋」前田嘉彦
- 10. 「ジェット機が来た」芝速三 入選七二点
- ◆ ビデオの部 入選
 1. 「江の口川71年と88年」岡崎昭平
 2. 「変わりゆく風景」福岡正志
 3. 「土佐電鉄あき線」森尾朋弘
 4. 「橋」城建太郎
 5. 「鏡川の橋」辻和利
 6. 「白滝こども自然王国の記録」森下正夫

〈事業団の出版物〉

土佐の芸能

高木啓夫著 定価四八〇〇円

現在、高知県下に伝わる伝統芸能を網羅。それぞれを神楽、獅子舞など十五項目に分類、詳説を施した芸能百科。

中山高陽

清水孝之著 定価三八〇〇円

藩政期、土佐の生んだ江戸南画の祖・中山高陽の全容を明らかにした労作。あわせて書翰集、資料集、年譜を収載。

高知県方言辞典

土居重俊著 浜田数義 定価六〇〇〇円

日常何気無く使っている言葉から古語に至る土佐方言を採録、意味と成り立ちを解明した土佐言葉の集大成。

おらんくことばてんこもり

定 価 八〇〇円

方言辞典に採録した方言約一万四千語が一目で分かる、B全両面ポスター。

明日を創る

高知レイト 大谷英二著 定価一〇〇〇円

高知の(まちづくり)に関する十七の計画書・提言を要約、解説した資料集。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) ③四三三六五

郵便振替 徳島8-14869